

こがねさんごうふん  
小金3号墳現地説明会資料

- |         |                       |
|---------|-----------------------|
| 1. 原因事業 | 平成20年度宮川用水第二期土地改良事業   |
| 2. 遺跡名  | 小金3号墳                 |
| 3. 所在地  | 多気郡明和町池村              |
| 4. 調査期間 | 2008年5月20日～11月28日（予定） |
| 5. 調査主体 | 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター |

### （1）はじめに

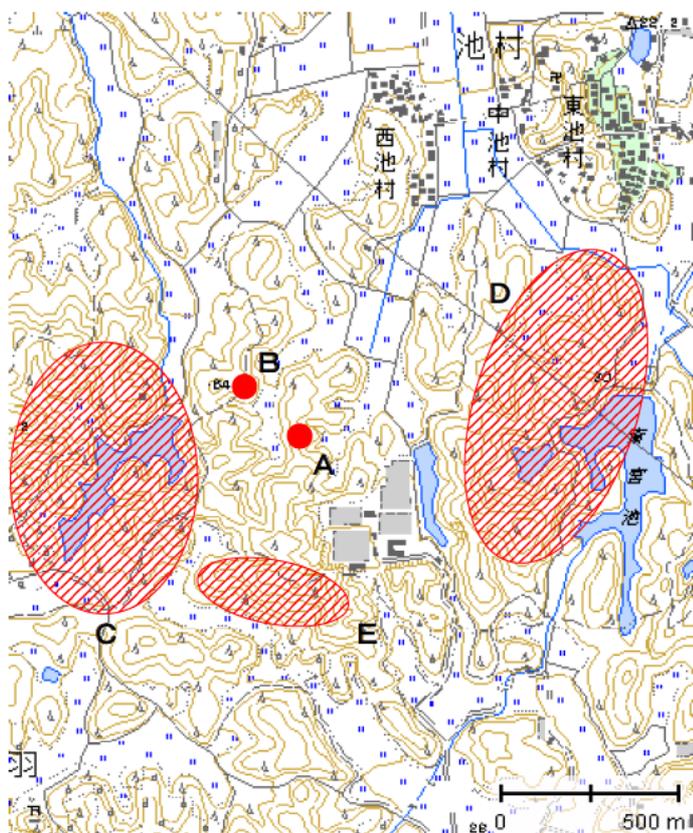
三重県埋蔵文化財センターでは、宮川用水第二期土地改良事業に伴って、平成10年度から主に明和町の齋宮池<sup>さいくういけ</sup>周辺に存在する遺跡の発掘調査を行ってきました。事業の対象となる範囲は主に丘陵地で、古墳が多く造られている場所です。そのため、いくつかの古墳が調査の対象となっています。今年度も、小金3号墳<sup>たかつか</sup>・高塚4～6号墳などの古墳について発掘調査を行って

います。小金3号墳では横穴式石室がほぼ完全な形で残っていることが判明しました。また、高塚4号墳も7世紀前半の方墳<sup>ほうふん</sup>で、しっかりと盛り土<sup>もど</sup>を積んで墳丘<sup>ふんきゅう</sup>を造っていることが分かってきています。

いずれの古墳もまだ調査途中のため、未解明の部分が多く残っていますが、今回は調査中の横穴式石室を見ることができ、小金3号墳を対象として、現地説明会を開催することになりました。

### （2）古墳の概要

小金古墳群は、9基程度の古墳からなる小規模な古墳群です。ただし、この古墳群はややまとまりに欠けており、また、古墳時代中期（5世紀代）から後期（6世紀代）にわたる幅広い年代の古墳が含まれている可能性もあります。そのため、ひとまとまりの古墳群<sup>おのおの</sup>というよりは、各々の古墳がやや独立的に存在しているよう



- A：小金3号墳    B：高塚4～6号墳  
C：上村池古墳群    D：齋宮池古墳群  
E：ユブミ古墳群

小金3号墳と周辺の古墳の位置

な状況と考えられます。

小金3号墳では、調査前から地表に大きな石が見えており、横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳と推定されていました。付近には上村池古墳群や斎宮池古墳群など、古墳時代後期の多数の古墳からなる古墳群がいくつか確認されています。しかしながら、これらの古墳群では横穴式石室をもつ古墳は少数派で、ほとんどは木棺を直接墳丘に埋めています(木棺直葬)。南勢地域全体からみても横穴式石室をもつ古墳は少数派で、小金3号墳はそうした横穴式石室をもつ数少ない古墳のうちの1つです。

### (3) 調査の成果

調査の結果、墳丘のまわりから周溝がみつき、直径が18mほどの円墳であることが判明しました。周溝は石室の入り口付近で途切れています。また、調査前から予想されていた通り横穴式石室が存在し、その残り方が非常に良好なことも分かりました。

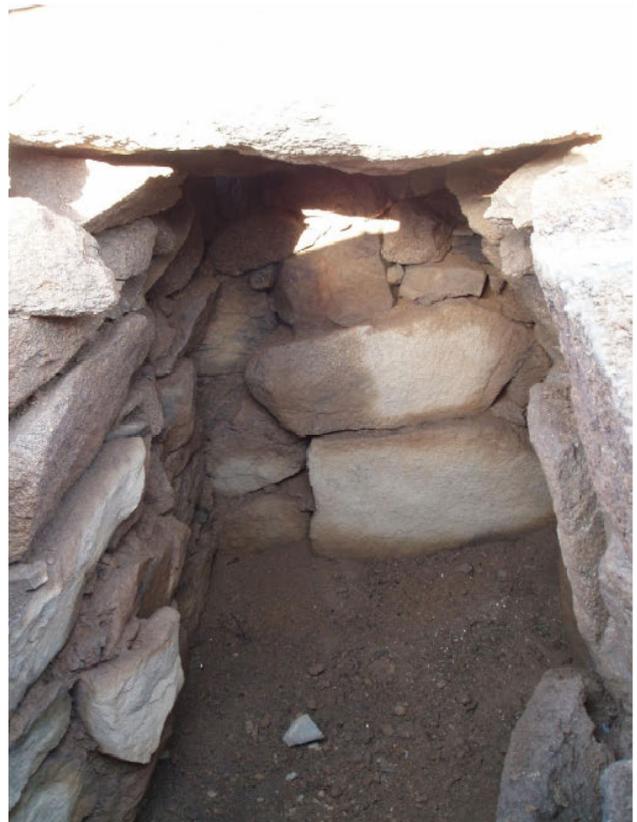
#### 【石室】

石室は比較的小さな石を積んで造られています。ただし、袖部付近や奥壁には比較的大きな石が使われています。特に、奥壁には表面が平らな石を選んで使っています。使われている石はもろい花崗岩がほとんどで、この古墳の近くでとれるものを用いていると考えられます。

石室の全長は 8.2mで、玄室は長さ4.5m、幅1.1m、高さ1.7mあります。両袖式とよばれ



天井石を露出させたところ



石室の奥壁

る、平面形が羽子板<sup>はごいた</sup>の形をしたものです。ただし、玄室が狭く羨道<sup>せんどう</sup>と幅がそれほど変わらないために、袖部がはっきりしません。また、玄室から羨道へと天井<sup>てんじょう</sup>が徐々に低くなるような構造になっています。こうした特徴は、同じ明和町にある上村池52号墳や伊勢市の高倉山古墳<sup>たかくらやま</sup>など、南勢地域の6世紀後半～7世紀初頭頃の横穴式石室にみられることから、小金3号墳もこの時期に造られたと推定できます。

注目されるのは、天井石<sup>てんじょうせき</sup>の置き方です。今回の調査では、後世に荒らされていない状態で天井部分の調査を行うことができました。石の微妙な重なり具合から見ると、天井石は、まず玄室に奥壁側から4枚を置き、続いて前壁部分<sup>ぜんへき</sup>の3枚を羨道側から置き、最後に羨道部分の2枚を置いた可能性が高いと思われます。また、隣り合う石との間にできたすき間には、小さな石を詰め込んですき間をふさいでいる様子も明らかにすることができました。天井部分が破壊を受けている横穴式石室が多い中、こうした情報を得ることができたことは、石室の造り方を知る上でとても重要な成果です。

### 【墳丘】

小金3号墳では、墳丘の残りが非常によいことが注目されます。横穴式石室とあわせて墳丘の盛り土の調査を行うことで、どのように古墳を造っていったのかを詳しく解明することができてきています。

石室の玄室部分を覆う盛り土<sup>おおももど</sup>については、次のように、大きく3段階に分けて積み上げられていることが分かりました。

まず、天井石の上にきれいな砂質の土をかぶせる（第1段階）。

次に、黒っぽい粘りけのある土と砂質の土を交互に何回も重ねて積む（第2段階）。

最後に、砂質の土を一気に積み上げて完成（第3段階）。



第3段階の盛り土

第2段階の盛り土

玄室の上の盛り土の様子

こうした玄室部分を覆う盛り土の積みかたに対して、羨道部分を覆う盛り土では、第2段階の粘りけのある土と砂質の土の交互積みがほとんど観察できませんでした。

第2段階の交互積みの盛り土は、石室への雨水の侵入を防いだりする上でも重要な働きをするものと推定されます。このことから、遺体を納める玄室部分については、羨道部分よりも丁寧に土を盛って墳丘が造られていることがうかがわれます。

#### (4) 出土遺物

今回の調査では、墳丘の周辺や墳丘の盛り土の中、周溝の中などから、土器が少量出土しています。今後さらに石室内の調査が進めば、埋葬された人に供えられた土器や鉄製品などが出土する可能性があります。

出土した土器には、大きく分けて須恵器と土師器の2種類があります。

##### 【須恵器】

須恵器は登り窯を使って焼かれた、灰色で硬い焼き物です。墳丘の周辺から、破片がいくつか出土しています。いずれも小さな破片ですが、高坏や壺などがあります。もともとは石室の中に納められていたものでしょうか。

これらの須恵器から小金3号墳の造られた時期を絞り込むと、おそらく6世紀末頃ではないかと考えられます。

##### 【土師器】

土師器は須恵器よりも軟らかく、茶色をした素焼きの焼き物です。小金3号墳からは坏と高坏が出土しました。坏のうち1点は、天井石の脇の盛り土の中からみつかりました。この坏が置かれていたのは、天井石を覆うきれいな砂質土の上で、ひっくり返した状態で置かれていました。この坏の底には、わざと穴を開けたあとが見られます。盛り土を積んでいく途中で何らかの儀礼が行われたことを示しているのかもしれませんが。また、周溝の中からも1点だけ土師器の坏が出土しましたが、これにも底に穴が開けられていたようです。



底に穴が開けられた土師器の坏（盛り土の中から出土したもの）

## (5) まとめ

小金3号墳は、この地域ではまだまだ数少ない、横穴式石室の貴重な調査例の一つとなりました。特に、墳丘や横穴式石室の造り方について詳しく解明できた点は、大きな成果といえるでしょう。

小金3号墳で確認された、粘りけのある土と砂質の土の交互積みのような墳丘の盛り土の積みかたは、三重県以外で発掘された横穴式石室をもつ古墳でも広く確認されているものです。したがって、南勢地域で横穴式石室をもつ古墳を造るにあたって、広い地域で用いられているのと同じ技術が使われていることが分かります。

また、石室の形からは、南勢地域の中におけるつながりが見えてきました。今回の調査でも明らかになったように、横穴式石室を造る技術は決して簡単なものではありません。南勢地域によく似た形の横穴式石室がいくつか造られていることから、ある特定の石室造りの技術を持った人々が、南勢地域のあちこちの有力者のもとで石室を造っていた可能性が考えられるのではないのでしょうか。

この古墳に葬られた人物については、残念ながら詳しいことは分かっていません。しかしながら、少なくとも横穴式石室を造ることができる技術を持った集団<sup>むか</sup>を迎え入れることができた一族であったことは間違いありません。そうした点で、南勢地域の中にいた他の有力者と太いパイプを持っていた人物であったと想像できるのではないのでしょうか。

## 【用語解説】

円墳（えんぷん）：平面の形が円い古墳。

周溝（しゅうこう）：古墳の周囲に掘られた<sup>みぞ</sup>溝。古墳をまわりから区画するために掘られる。

坏（つき）：お椀<sup>わん</sup>のような形の土器。

墳丘（ふんきゅう）：古墳の、土を盛って造られている部分。

方墳（ほうふん）：平面の形が四角い古墳。

盛り土（もりど）：墳丘を造るために積み上げられた土。

横穴式石室（よこあなしきせきしつ）：遺体を納めるために造られた<sup>いしづ</sup>石積みの部屋。横方向に掘られた穴のような形のため、横穴式とよばれる。

奥壁（おくへき）：石室の一番奥の壁。

前壁（ぜんへき）：玄室と羨道間の天井部分に生じた段差の、玄室側を向いている壁。

側壁（そくへき）：石室の横側の壁。

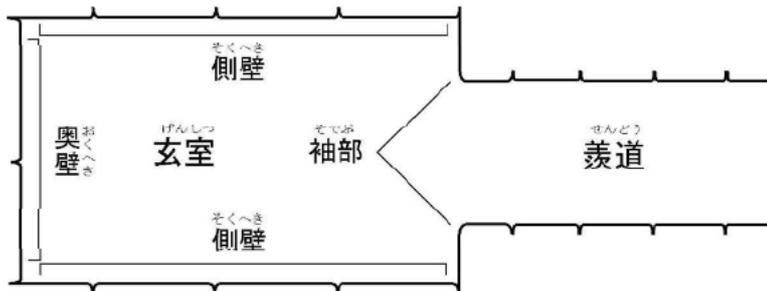
袖部（そでぶ）：羨道から玄室へと入る部分に生じている屈曲部分。この袖部が両側にあるものを両袖式、片方にあるものを片袖式とよぶ。

羨道（せんどう）：玄室へ入るための通路となっている部分。

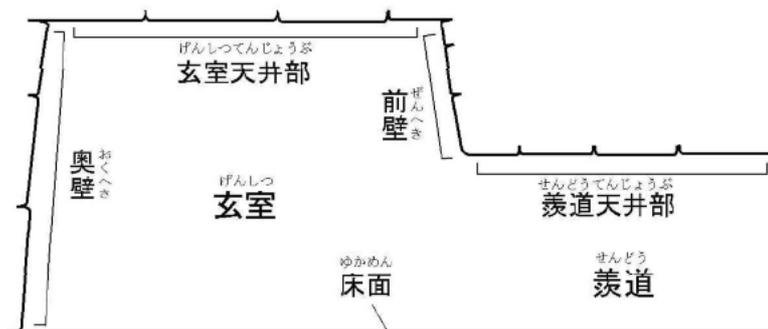
玄室（げんしつ）：遺体を納めるための部屋。

天井石（てんじょうせき）：天井に蓋をするように置かれている石。

床面（ゆかめん）：石室の床の部分。



【石室を上から見たところ】



【石室を横から見たところ】

#### 横穴式石室の各部分の名称

調査担当：三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱ課

〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503

TEL：0596-52-7031 FAX：0596-52-7035

ホームページ：http://www.pref.mie.jp/MAIBUN/HP/